

2025年9月7日（日）「十四万四千人とともに」

ヨハネの黙示録 14:1-5

1 また、私が見ていると、小羊がシオンの山に立ち、小羊と共に、十四万四千人の者たちがいて、その額には小羊の名と、小羊の父の名とが記されていた。2 私は、大水のとどろきのような、また激しい雷鳴のような音が天から響くのを聞いた。私が聞いたその音は、琴を弾く者が奏でる竖琴の響きのようであった。3 彼らは、玉座の前、また四つの生き物と長老たちの前で、新しい歌を歌っていた。この歌は、地上から贖われた十四万四千人の者たちのほかは、誰も覚えることができなかった。4 この者たちは、女によって汚されたことがない。彼らは純潔だからである。この者たちは、小羊の行くところへは、どこへでも従って行く。この者たちは、神と小羊に献げられる初穂として、人々の中から贖われた者たちで、5 その口には偽りが無い。彼らは傷のない者である。

【序論】

私たちは毎週このように教会に集っていますが、この一見何でもない習慣が実は永遠的な意味を持っているということをお忘れしないようにしたい。神の民が一つ所に集まって礼拝をささげる、実はこれは単なる「地上的な営み」なのではなく、まだ見ぬ「永遠の世界での礼拝」の先取りなのです。日頃私たちはそれほどの意識をもって教会に集ってはいないかもしれませんが、しかしながら、黙示録は何度も「天の礼拝」の姿を描きながら、「あなたがたもそのメンバーに加えられているのだよ」とエールを送ってくれています。私たちの教会は小規模ではありますが、主イエスを愛する民として忠実に礼拝をささげようとしている。私はそのことを誇りに思いながら、牧会の働きを担わせていただいています。

【本論】

今日から14章に入ります。13章の不気味な「獣」の描写から一転、本章では再び天の礼拝に目が向けられます。しかし、これら二つの章には「額に記された名」というある種の共通項があり、その「名」が誰のものであるか——獣か、小羊か——によって、「所属」における決定的な違いがある。読者が「誰のもの」であるかが問われているのです。

本論1. 小羊と父の名が記された十四万四千人

また、私が見ていると、小羊がシオンの山に立ち、小羊と共に、十四万四千人の者たちがいて、その額には小羊の名と、小羊の父の名とが記されていた。(14:1)

「十四万四千人」という表現は7:4に出てきました。

私は、刻印を押された人々の数を聞いた。それはイスラエルの子らの全部族の中から刻印を押された人々であり、十四万四千人であった。(7:4)

「十四万四千人」とは、イスラエル十二部族の「12」を12倍し、更に1000倍した象徴的な数字——すなわち「完全な神の民」を表します。救われる人の人数がこの数に限定されているということではありません。全歴史の中で神の恵みにあずかった人々であり、「普遍的教会」とも呼ばれます。

この人々の額には、誰の所有であるかが分かるように、「小羊の名」「小羊の父の名」が記されています。13章では「獣の刻印」という表現が出てきましたが（13:16-18）、それとは明らかな対照となっている。御子イエスと父なる神様、その両者の名が書き記されているという二重の守りです。主イエスを信じる人々には「神の所有」という聖なる刻印が押されているのです。奴隷制の下では、その奴隷が誰の所有であるかが分かるように焼きごてが施され、それは一生消えることのない「痕」として奴隷の体に残りました。このような辛い史実に照らして見ると、キリスト者に押されている刻印という表現に「痛み」のようなもの感じてしまう人もいられるかもしれません。しかしながら、ここでは「決して神に捨てられることのない所有の約束」という優しく安心をもたらす意味が込められています。そして、その「小羊の刻印」とは本質的に「聖霊の内在」です。

地上では、人間は何らかの意味で「刻印」を押されている存在なのではないでしょうか。生まれたその時から出生届によって「国民登録」が行なわれ、住民票によってどこに住んでいるかが把握され、今では一人ずつスマホを持つことで電話番号や各種IDと個人がほぼ結び付けられており、GPSによって居場所が特定され、マイナンバーによって国民一人ひとりに番号が当てがわれています。事実上、私たちには政府や無国籍企業によって「目に見えない刻印」が押されていると言えるのかもしれません。

しかしながら、キリスト者にはもう一つの異質な刻印が押されている。それは「小羊の名」「小羊の父の名」という「聖なる刻印」であって、永遠的意味を持つものです。主イエスは「良い羊飼い」であって、ご自分に属する羊たちを愛し、命懸けで守られる。パウロは「私は、この身に、イエスの焼き印を身に帯びている」（ガラテヤ6:17）と言って、その光栄と、それゆえの使命とを喜んでいます。私たちの人生において当てがわれる「刻印」は、地上の生涯を終えるときに消えてなくなります。しかし、「イエスの焼き印」は永遠に残るしるしであって、何者もそれを消すことができません。

本論2. 新しい歌

私は、大水のとどろきのような、また激しい雷鳴のような音が天から響くのを聞いた。私が聞いたその音は、琴を弾く者が奏でる豎琴の響きのようなであった。（14:2）

これと似た表現はこれまでも出てきましたが、異なる点があります。それは、ここでは何の指示のことばも伴わない「天来の音」であるということ。「大水のとどろきのような、また激しい雷鳴のような音」と「琴を弾く者が奏でる豎琴の響き」という二つの表現は、相容れない感覚を抱かせます。最近の出来事として、8月18日（月）の夕方に西東京市は雷雨に見舞われましたが、1時間以上もドカンドカンと雷鳴が轟き続け、徐々に怖い思いをしました。こ

の自然現象は、いつの時代にも人間に恐怖心を抱かせてきたものであるはずですが。ここでの「天来の音」は、著者ヨハネにとってそのような大きな音であり、それはおそらく地上の人間の耳にはそのように聞こえる「異次元の音」なのだと想像します。しかし、よく聞くとその音は楽器のような美しい響きを伴っていることが分かった。何と、それは「十四万四千人」による賛美の歌声だったのです。

彼らは、玉座の前、また四つの生き物と長老たちの前で、新しい歌を歌っていた。この歌は、地上から贖われた十四万四千人の者たちのほかに、誰も覚えることができなかった。(14:3) 天の礼拝において全会衆が歌う賛美。「新しい歌」という表現は詩編の中によく見られますが(33:3、40:4、96:1、98:1、144:9、149:1)、これは新規に作曲される賛美歌であると同時に、新しい心で歌う賛美でもあります。天上の賛美にも両方の意味が含まれていると思われませんが、「十四万四千人の者たちのほかに、誰も覚えることができなかった」と言われるように、この会衆に属していなければ覚えることも歌うこともできない類のものであることが分かる。それは、神の国の完成との関わりがあり、そこに所属する人数が確定したところの、その領域に入っていなければ理解することも歌うこともできない賛美だということでしょう。

私たちが地上の礼拝で歌う賛美は、理解できることばで歌われます。むしろ、文語の讚美歌では意味が分からないから、口語に直して、誰にでも分かる内容に変更していくのが今の風潮です。何を言っているのか分からない賛美は、ある人にとっては呪文のように感じてしまうのかもしれませんが。このことの意味するところは、地上にあっては誰もが賛美という営みに招かれているということです。つまり、「神の恵みにあずかりませんか?」「救いを受け入れ、私たちと心を合わせて賛美しませんか?」というメッセージが込められているのです。しかし、その呼びかけができるのは現在の世にあってのみ。天地が新しく創造されるとき、賛美は贖われた民だけのものとなるのです。

本論 3. 純潔

この者たちは、女によって汚されたことがない。彼らは純潔だからである。この者たちは、小羊の行くところへは、どこへでも従って行く。この者たちは、神と小羊に献げられる初穂として、人々の中から贖われた者たちで、その口には偽りが無い。彼らは傷のない者である。

(14:4-5)

「十四万四千人」について「女によって汚されたことがない」「純潔」という、少々気になる表現が出てきます。これは、結婚しなかった者とか、性的関係を誰とも持たなかったということを行っているのではなく、霊的な意味で偶像礼拝に陥らなかった者を意味します。黙示録では、人を偶像礼拝に誘う暗黒の力のことが「大淫婦」「大バビロン」(14:8、16:19、17:1、5、18:2、19:2)などの表現で表されています。第一世紀の文脈では大ローマ帝国を表すものとして読まれたはずですが、時代が進み、多重的な意味を持つようになりました。いずれの時代にあっても、神の上に人が立とうとする、あるいは人間が神になろうとするような社会的

風潮が強まる傾向があります。それは気づきにくい形でジワジワとそういう環境が作られていくことが多い。しかし、そのような危機に敏感に気づき、純粋な神礼拝を守り続けようとする人々もいます。小羊イエスの背中をただ見つめながら信仰に立ち続ける人々、羊飼いの声を聞き分け主イエスのことばにこそ真理があることを認め続ける人々です。

「この者たちは、小羊の行くところへは、どこへでも従って行く」と言われています。「十四万四千人」にとって、従うべきお方はキリストのみ。その関係を妨げるものはもはやありません。しかし、地上の教会は尚も戦いの中にあります。多くの妨げが、私たちがキリストから引き離そうとする現実がある。それは、罪への誘いであり、神ならぬものを拝することへの誘導かもしれません。私たちは足元を掬われないように注意深くあるべきでしょう。しかし、「大丈夫だろうか」「失敗しないだろうか」とビクビクすることよりも、キリストの背中をしっかりと見つめ続けること、主の御足の跡を踏み続けることにこそフォーカスし続けたい。パウロはキリスト者のことを「神の子」と呼び、キリストと共に神のすべての財産を共有する存在だと説明しています。

子どもであれば、相続人でもあります。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共に栄光をも受けるからです。(ローマ 8:17)

この特権にあずかる人々は、キリストとすべてを共有するわけですから、主イエスの苦しみも栄光も分かち合うと言われています。ですから、もし私たちが福音宣教のために涙を流すことがあるならば、それはキリストの苦しみの一部を味わっていることになる。そして、それは幸いなことなのです。この聖句も添えておきましょう。

涙と共に種を蒔く人は、喜びの歌と共に刈り入れる。(詩編 126:5)

すぐに成果が見られなかったとしても、懸命に御言葉の種を蒔き続けましょう。福音に生き、キリストの平和をもたらし続けたい。「神と小羊に献げられる初穂」という表現は、キリストにある新しいいのちを生き始めた人々を意味します。どのように生きるべきであるかの判断は、「主イエスがどう生きられたか」を基準として見極められるのです。

【結論】

私たちが毎週集まって礼拝をささげることが、ただの習慣ではありません。「十四万四千人」の一人に数えられている者としての自覚をもって主の御前に出ているのです。私たちが賛美をささげるとき、その歌声は天の賛美とひとつとされている。そして、彼らが小羊イエスだけを牧者として歩んでいるように、私たちも戦いを経ながら同じ方の足跡を踏み続けている。地上にあっては励ましがが必要です。そして、共に信仰の道を歩み続ける仲間が不可欠です。そんな思いをもって、日曜日の礼拝で顔を合わせることを楽しみに、週の六日の旅路を歩んでいきたいと思えます。

【祈り】

愛する天の父なる神様。今日、御言葉を通して示された「小羊の名と父の名を記された者」としての歩みを覚え、感謝いたします。私たちの額には、目には見えなくとも、永遠に消えることのない刻印が記されています。どうかそのしるしを誇りとして、この時代にあっても確かに従い続ける者とならせてください。天から響く大水のとどろきのような、新しい歌を歌う群れに、私たちも加えられていることを覚えます。地上では弱さもあり、心が乱れることもあります。私たちの賛美と祈りを受け取り、天の礼拝とひとつにしてください。小羊の行かれるところへ従う群れのように、私たちも主イエスの足跡を踏み、偽りのない純潔な心で、日々を歩み続けることができますように。そして、涙をもって蒔いた種が、必ず喜びの収穫となることを信じさせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

十四万四千人に象徴されるご自身の民を見出し、その額に「小羊と父の名」の刻印を押してくださる、主イエス・キリストの恵み、

この唇に「新しい歌」を授け、天の大いなる賛美に加えてくださる、父なる神の愛、

心に書き記された「刻印」となって、主の御足の跡を辿らせてくださる、聖霊の親しき交わりが、

ここに集う一人ひとり、その家族と、友人と、この時代を生きるすべての信仰者の上に、今も後も、代々限りなくありますように。